

令和 7 年度病虫害発生予報第 7 号の発表について

このことについて、次のとおり発表したの送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量
カンキツ	貯蔵病害（緑かび病、青かび病）	並
	ミカンハダニ	並
カ キ	炭疽病	やや多
果樹の 共通害虫	カメムシ類	やや多
	吸蛾類	多
キャベツ	黒腐病	並
	べと病	並
	アブラムシ類	並
ブロッコリー	黒腐病	並
	べと病	並
	アブラムシ類	並
青 ネ ギ	軟腐病	やや多
	疫病	並
	ネギハモグリバエ	並
	ネギアザミウマ	やや多
イ チ ゴ (施設本圃)	うどんこ病	並
	炭疽病	やや多
	アブラムシ類	やや多
	ハダニ類	やや多

作物名	病虫害名	予想発生量
ニンジン	黒葉枯病	やや少
	萎黄病	やや少
	ハモグリバエ類	やや少
アスパラガス（施設栽培）	褐斑病	並
	ネギアザミウマ	やや多
	ハダニ類	やや多
	アブラムシ類	やや多
露地キク	白さび病	やや少
	アブラムシ類	並
	アザミウマ類	やや多
	ハダニ類	やや多
野菜、花きの 共通害虫	ハスモンヨトウ	並
	シロイチモジヨトウ	多
	コナガ類	少
	タバコガ類（タバコガ、オオタバコガ）	やや多

太文字の病虫害：向こう 1 か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号

- (+) ：発生量を多くする要因
- (-) ：発生量を少なくする要因
- (±) ：発生量が平年並になる要因

令和 7 年度 病虫害発生予報 第 7 号 (10 月)

A. 果樹の病虫害

ーカンキツー

1. 貯蔵病害 (緑かび病、青かび病)

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 一般圃場での 9 月下旬の発生は認められなかった (－) が、裂果が見られる果実が多く、日焼け果も多かった (+)。

(2) 10 月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 収穫 10～30 日前に薬剤防除を行う。

(2) 収穫、選果、運搬時には果実に傷をつけないように注意する。貯蔵する前には必ず予措を行うとともに、貯蔵中は貯蔵庫内の温湿度管理に十分配慮する。

2. ミカンハダニ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 県予察圃場での 9 月の発生量は平年並であった。(±)

(2) 一般圃場での 9 月下旬の発生は認めなかった。(－)

(3) 10 月の気象は気温が高く (+)、降水量がほぼ平年並 (±) の予報である。

対 策 (1) 秋期のミカンハダニの果実寄生は品質の低下につながるので、寄生を認めれば速やかに薬剤防除を行う。

(2) 薬剤散布に当たっては、散布むらのないよう丁寧に行う。

(3) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一成分を含む農薬の使用は年 1 回とする。

ーカ キー

1. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 一般圃場での 9 月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

(2) 10 月の気象は気温が高く (+)、降水量がほぼ平年並 (±) の予報である。

(3) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)

対 策 (1) 薬剤防除はかけむらのないよう丁寧に散布し、降雨が続く場合は、降雨の合間に散布する。

(2) 圃場内をよく観察して、発病果実や発病枝は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。前年に発生が確認された圃場では特に注意する。

(3) すでに収穫が始まっている品種もあることから、薬剤防除の際には収穫前日数及び使用回数に注意する。

ー果樹の共通害虫ー

1. カメモシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 9 月の県予察圃場予察灯の誘殺数は平年並であった。(±)

- (2) 10月第1半旬の県予察圃場予察灯の誘殺数は多かった。(+)
- (3) 9月の綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は平年並であった。(±)
- (4) 一般圃場の9月下旬の発生はカンキツ、カキでは認めなかった。(－)
- 対 策 (1) カンキツ類は、着色前の果実でも吸汁されると果実内部が褐変し、落果するため注意する
- (2) 施設栽培の場合は、開放口をネット(4mm目合い)で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。
- (3) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
- (4) 多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。
- (5) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
- (6) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。
- (7) 防除薬剤は、主要農作物病害虫雑草防除指針、香川県監修の果樹病害虫防除暦を参考にする。

2. 吸蛾類(アカエグリバ、ヒメエグリバ)

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 多
- 根 拠 県予察圃場予察灯の9月の誘殺数は多かった。(+)
- 対 策 (1) 熟果及び裂果などを早めに取り除き、適正に処分する。
- (2) 被害の多い場合は、夜間の捕殺、網掛け、黄色蛍光灯などで対応する。

B. 野菜、花きの病害虫

ーキャベツー

1. 黒腐病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
- (2) 10月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。
- (2) すでに発生している圃場ではオキシリニック酸やカスガマイシンを含む薬剤を散布する。
- (3) 台風など大雨や強風の後には感染が助長されるので、早めに薬剤防除を行う。

2. ベと病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
- (2) 10月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
- (2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。

- (3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は認められなかった。(－)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は平年並であった。(±)
(3) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 育苗期から生育初期に薬剤を散布または灌注処理する。
(3) 抵抗性の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーブロッコリーー

1. 黒腐病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の年内どりブロッコリーでの発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 10月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。
(2) すでに発生している圃場ではオキシリニック酸やカスガマイシンを含む薬剤を散布する。
(3) 台風など大雨や強風の後には感染が助長されるので、早めに薬剤防除を行う。

2. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の年内どりブロッコリーでの発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 10月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は平年並であった。(±)
(3) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

- (2) 育苗期から生育初期に薬剤を散布または灌注処理する。
- (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ー青ネギー

1. 軟腐病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや多かった。(+)
 (2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。
 (2) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
 (3) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているなので、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
 (4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。

2. 疫病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は認められなかった。(－)
 (2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
 (2) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているなので、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
 (3) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。

3. ネギハモグリバエ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 10月の気象は気温が高い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど適切に処分する。
 (3) 多発してからの防除は困難であるので、発生の兆しが見られたら早めに防除する。
 (4) 定植時には育苗トレイ灌注をする。

4. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
 (2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－イチゴ（施設本圃）－

1. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 9月下旬の発生量は平年並であった。（±）

- 対 策 (1) 気温低下による再発生に注意し、薬剤散布は発生初期から5～7日間隔で行う。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや多

根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや多かった。（＋）
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。（＋）

- 対 策 (1) 発病株は見つけしだい除去し圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(2) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
(3) MBC殺菌剤（FRACコード：1）、N-フェニルカーバメート類（同：10）、QoI殺菌剤（同：11）、PP殺菌剤（同：12）に対して感受性の低い菌株が確認されているので注意する。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや多

根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は平年並であった。（±）
(3) 10月の気象は気温が高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

4. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや多

根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。（＋）

- 対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 発生が局所的な場合には、気門封鎖剤のスポット散布を行う。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－ニンジン－

1. 黒葉枯病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 9月下旬の発生は認められなかった。（－）
(2) 10月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

- 対 策 (1) 肥料切れに注意し、株の勢いが衰えないように栽培管理する。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。

2. 萎黄病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は認められなかった。(－)
(2) ニンジンでのヒメフタテンヨコバイの9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(3) 綾歌郡綾川町の予察灯でのヒメフタテンヨコバイの9月の誘殺数はやや少なかった。(－)

- 対 策 (1) 発病株は早期に抜き取り、適正に処分する。
(2) 近隣に休耕田や雑草地がある圃場では、アブラムシ類やヒメフタテンヨコバイの発生が多くなるので、アブラムシ類防除を徹底し、ヒメフタテンヨコバイの発生を少なくする。

3. ハモグリバエ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は認められなかった。(－)
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 摘葉した残さや収穫終了後の茎葉は発生源になるので、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 多発してからの防除は困難であるので、発生の兆しが見られたら早めに防除する。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－アスパラガス（施設栽培）－

1. 褐斑病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 10月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 過繁茂にならないよう、茎葉の刈込みや適切な肥培管理を行う。
(2) 刈り取った被害茎葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
(4) QoI殺菌剤（FRACコード：11）に対して感受性の低い菌株が確認されているので、防除効果が低い場合は注意する。

2. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 10月の気象は気温が高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設したりするなどして、侵入防止対策を講じる。

- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない

3. ハダニ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。(+)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 刈り取った茎葉は圃場から持ち出し、処分する。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. アブラムシ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は平年並であった。(±)
(3) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

ー露地キクー

1. 白さび病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや少**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は小ギク、輪ギクともに認められなかった。(－)
(2) 10月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理をする。
(2) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で実施し、曇雨天が続くような場合には防除間隔を短縮する。発生が多い場合には治療効果のある薬剤を散布する。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. アブラムシ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **並**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は小ギクでは平年と同様に認められず(±)、輪ギクでは平年並であった(±)。
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は平年並であった。(±)
(3) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 今後作付けを行う場合は、光反射資材を張るなどして侵入防止対策を講じる。

- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. アザミウマ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は小ギクではやや多く(+)、輪ギクでは多かった(+)。
(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) アザミウマの吸汁により、ウイルス病が媒介される場合や食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、食害が認められる場合は早期に防除を行う。
(2) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
(3) シルバーマルチ等を被覆することで飛び込み量を減らすことができる。
(4) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(5) 抵抗性発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

4. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は小ギクでは平年並(±)、輪ギクではやや多かった(+)。
(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 発生が局所的な場合には、スポット散布を行う。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ー野菜、花きの共通害虫ー

1. ハスモンヨトウ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は、キャベツでは発生は認められず(－)、ブロッコリーでは平年並(±)であった。
(2) フェロモントラップでの9月の誘殺数はやや少なかった。(－)
(3) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場周辺の雑草は増殖源となるため、発生前からの除草に努める。
(2) 若齢幼虫は集団で食害するため、被害葉は表皮だけを残して白色になっているので、本圃の果菜類等ではこれらを発見したら摘葉するとともに薬剤防除を行う。
(3) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
(4) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1 cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。

- (5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. シロイチモジヨトウ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **多(令和7年9月26日付け病害虫発生調査速報第2号発表)**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は、青ネギではやや多く(+)、ブロッコリーでは平年並(±)であったがその他の野菜花き類で発生の多い地区があった(+)
(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの9月の誘殺数は多かった。(+)
(3) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場周辺の雑草は増殖源となるため、発生前からの除草に努める。
(2) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. コナガ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 少

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生はキャベツでは平年と同様に認められず(±)、ブロッコリーでは認められなかった(－)
(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの9月の誘殺数はやや少なかった。(－)
(3) 10月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。
(2) 定植時に灌注処理や粒剤を施用するとともに発生初期から薬剤防除を行う。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. タバコガ類(タバコガ、オオタバコガ)

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は秋キュウリでは平年並であった。(±)
(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの9月のタバコガ類の誘殺数はやや多かった。(+)
(3) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 花蕾や生長点を食害するので、被害が見られたら直ちに薬剤防除を行う。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所 インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>



近隣農地の作物等や住宅地等での農薬飛散防止の注意が必要です。
風の状況を確認し、飛散の恐れがあるときは散布作業を中止しましょう